

日本の湿地の概観

河川：

日本にはおよそ109水系1万4000本の主要河川があるが、山がちな国土のためその全長は短く、山から海に向けて急勾配で流れくだる川が多い。上流に大量の雨が降ると一気に増水し、洪水を引き起こすことも多く、洪水・治水対策は、日本の河川環境管理の大きな課題となっている。そのため、特に重要な113の河川のうち、ダムや堰などの人工構造物のない自然の状態のままの河川は少なく、河岸の多くは人工護岸となり、水生生物の生息環境は年々悪化している。

ラムサール条約湿地を抱える北海道の別寒辺牛川は、水際線の自然地率が100%となっている数少ない自然河川のひとつである。

淡水湖沼：

日本には山岳地帯にある湖沼をはじめ、海が後退してできた海跡湖のように平野部や海岸近くに存在するものなど、さまざまな湖沼が数多く点在している。

日本の最大の湖は滋賀県の琵琶湖(約6万7000ヘクタール)で、そのほかにもラムサール条約湿地として登録されている淡水湖沼は、北海道のクッチャ口湖、阿寒湖、宮島沼、ウトナイ湖、大沼、宮城県の伊豆沼・内沼、蕪栗沼、新潟県の佐潟、石川県の片野鴨池、鹿児島県の蘭牟田池などがある。多くはガンカモ類など渡り性水鳥の生息地であるが、淡水魚類や藻類、またトンボなど水生昆虫の生育地としても重要である。

日本では天然の淡水湖沼のほか、大山上池・下池、瓢湖など、水田の灌漑水源としてつくられ、管理されている人工的なため池も、渡り性水鳥をはじめとするさまざまな野生生物の生息地として重要な役割を果たしている。

水田：

日本の国土3800万ヘクタールのうちの250万ヘクタールは水田である。水田耕作は古来、日本の最も主要な生計手段であり、水田とその周辺の水路、ため池、そして落

葉広葉樹を中心とする里山林などは、わが国の主要な二次的自然環境を形づくってきた。こうした二次的自然環境は、下草狩りや池干しといった人々の生活のなかで行われる適度なく乱によって保たれ、豊かな生物多様性を育んできたが、現在は生活様式の変化により、そうしたバランスが崩れつつあることが問題となっている。

水田は、私たちの食糧生産の場であると同時に、シギ・チドリ類、ガンカモ類などの渡り鳥にとって重要な採食場、休息場所でもあり、また、魚類、昆虫などの水生生物にとってかけがえのない生息環境



を提供している。日本のラムサール条約湿地には、宮城県の蕪栗沼・周辺水田、石川県の片野鴨池、兵庫県の円山川下流域・周辺水田といった水田を含む湿地が登録されている。また北海道の宮島沼、宮城県の伊豆沼・内沼、新潟県の佐潟など、周囲を水田に囲まれ、これらの水田と一体になった湿地生態系を形成しているラムサール条約湿地は数多い。

また、日本は、2008年に開催されたラムサール条約第10回締約国会議にて、湿地システムとしての水田の生物多様性向上に係る決議案を韓国と共同で提案し、全会一致で採択された(資料1参照)。

地下水系：

ラムサール条約の扱う湿地のタイプには、石灰岩地域に形成される地下カルストと洞窟性水系も含まれる。山口県の秋吉台は日本最大のカルスト台地で、その地下水系と3つの洞窟(鍾乳洞)はラムサール条

約湿地に登録されている。

海岸線：

6000以上の島からなる日本の海岸線は、総延長が約3万2800kmにもものぼるが、そのうち人口改変されずに自然の状態を保持している自然海岸は53.1%で、海岸線の人工化は進む一方である。わが国では1978年以降の20年間だけで、約1300kmの自然海岸を失い、特に北海道、本州、四国、九州の4島における自然海岸の比率は42.3%と半分以下である。

ラムサール条約湿地としては、後背の山林とともに自然海岸がよく保全されている広島県の宮島や、北太平洋最大のアカウミガメの産卵地として知られる鹿児島県屋久島の永田浜(自然海岸、砂浜)がある。

汽水湖：

日本の海岸線には、海が後退してできた海跡湖が多く存在し、その多くは湖口が海とつながる汽水湖である。河川の最下部にあって有機物(栄養塩類)が流入し、水深が浅く、海水と淡水が入り混じる複雑な生態系をもつ汽水域は一般に生物生産性が高く、海洋生物資源のゆりかごとして、また沿岸漁場として人間にとっても重要な役割をになっている。

ラムサール条約湿地としては北海道の瀧瀨湖、風蓮湖、厚岸湖、茨城県の酒沼、福井県の三方五湖、鳥取県と島根県にまたがる中海、島根県の宍道湖などの汽水湖が登録されている。

藻場：

沿岸域の海底でアマモなどの海草や、ホンダワラ、コンブ、ワカメなどの海藻が群落を形成している場所を藻場という。藻場は、酸素の供給、水質浄化、海底の安定化などの機能を持ち、また魚類やウミガメなどの餌となり、産卵・生育場所や隠れ場を提供するなど、沿岸域の生物にとって重要な存在である。日本人も昔から漁場として利用し恩恵を受けてきた。

海域生物環境調査藻場調査(1994年)